日本行動計量学会会報
第5号
1975年2月1日
日本行動計量学会
事務局
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健
学科疫学教室内

"QUO VADIS"

池田央

行動計量学会が正式に発足してすでに一年半余りが経過した。これまでに和文誌二回、欧文誌一回を発刊し、月例シンポジウムも五回、講習会も二回開催を数えるようになった。ここまでこの学会が何とか成長を続けてこられたのも林理事長のすぐれたリーダーシップはもちろんのこと、理事や運営委員、編集委員の方々の努力のお蔭である。なかでも事務局の柳井、丸山、梶田、岩坪、松原各委員の献身的努力がなければ、学会の維持運営が難しかったことは間違いない。会員全員に代って御礼を述べさせていただきたい。

この学会は恐らくもっとも広範囲な専門領域にまたがって会員を擁しているという意味で、もっとも学際的なユニークさをもっている。それだけに運営上広い範囲から会員の意見を公平に吸収するのがむずかしい。名簿上では会員であっても実際上わたくしたち運営委員がすべての人を存じあげているわけではないから、どうしてもわたくしたちの考えが偏狭なものになるのではないか。あるいは一方的なクローズドな運営になりはしないかといつも気がかりである。しかし、少くともこの学会のよさは、それぞれのメンバーが比較的既成の権威や伝統にしばられず、たてまえ論とか筋にこだわるよりは、柔軟な思考構造をもって機能的に動き、新しいものなら何でも飛びついてみたいという好奇心に満ちた集団であるように思えることである。それは目標がはっきりしない、何を指向しているか分らないといったこの会に対する批判につながるものであるかも知れないが、柔構造でオープン・マインデッドな体質は、少くともわたくしにとって住みごこちの悪い学会ではないようである。そのような特質はいつまでも崩したくないと考えている。

しかし、住みごこちのよさだけに安住しているわけにはいかない、学会が知的雰囲気にオブラートされたサロンになっては具合が悪いからである。それを防ぐには、それこそ柔軟な発想と良い意味での知的刺激とそれを実行に移すエネルギーが必要である。どうすればそのようなエネルギーを全員に供給できるような学会になり得るか、運営委員会はできるだけ会員の自由な創造的活動を促進できるようお膳立てて行きたいと思っている。折から今年の学会大会の準備をはじめなければならない時期でもあり、みなさんの建設的な御意見と御協力を期待している次第である。

（日本行動計量学会理事・運営委員会委員長・立教大学教授）

和文誌・欧文誌への投稿と編集への御意見を！

和文誌、欧文誌とも、幸いにして好評のようですが、さらに一層内容を充実したものとするため、会員の方々が奮って御投稿下さるよう編集委員会では望んでおります。欧文誌第二号の〆切りは二月末日（当初の期日から延長されました）、和文誌第四号（三巻一号）の〆切りは三月末です。

なお、和文誌第四号は「分布」を特集テーマとし、各分野の方々に依頼した論文も合せて掲載する予定ですが、一般論文は特集テーマと関係のないもので結構です。

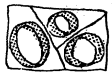
特集や展望のテーマに関する要望、その他学会誌の編集に関する御意見等も編集委員会（事務局気付）までお寄せ下さい。

第三回学会総会は青山学院大学で

—今秋の学会開催校決まる—

本年初秋に予定されている第三回学会総会については、青山学院大学での開催という線で検討が進められてきたが、このほど最終的に決定され、大会実行委員会が発足することになった。大会実行委員としては、運営委員会より、池田央、小谷津孝明、近藤遠、開催校より、豊川裕之、小谷津孝明、近藤遠、開催校より、瀬谷正敏、鈴木栄一、高森寛、森平爽一郎、それに加えて事務局の各委員が予定されている。今後のスケジュールの検討を計るため、十二月二十三日に、開催校と運営委員会、事務局の連絡会が開かれ二月下旬に第一回大会実行委員会を青山学院大学において開くこと等が決定された。なお、大会実行委員長には、瀬谷正敏氏が就任の予定である。

発表申し込みの要領等については、近いうちに実行委員会から公表されるが、大会の持ち方等について意見や要望があれば青山学院大学文学部教育学科気付で実行委員会までお知らせいただきたい。



会費未納者はすぐに納入を

今年度も終わりに近くなってきました。会費未納の方は至急、事務局あて御納入下さい。正会員は二千円、準会員は千円です。送金には振替（振替番号　東京一四八〇五六）を御利用下さい。

会費が順調に納入されませんと、和文誌および欧文誌の刊行にも差しつかえが生じます。なお、会則により、長期間会費未納の場合には、学会を退会したものとみなされます。

研究会だより

新しいサブグループ研究会

—「計量社会分析研究会」へのおさそい—

高森寛、森平爽一郎（いずれも青山学院大学）の両氏を発起人として、「計量社会分析研究会」の発足が準備されている。関心のある方は、ふるって御参加いただきたい。この研究会はソーシャル・アセスメントに関連した諸問題を概念化・計量化の両側面から検討し、社会データ・バンクやポリシー・サイエンスに関連した諸問題をも含めて研究する予定であり、これ等に関心のある方々のための討論と情報交換の場を作りたいということである。第一回会合の日時は本会報発行より約一ケ月後に予定されているが、正確な日時等については発起人に連絡をとっていただきたい。発起人の連絡先は「渋谷区渋谷四—四—二五　青山学院大学計算センター　〇三—四〇〇—一五四六」である。

サブグループ研究会に関心のある方は連絡を！

これまでにもお伝えしてきたように、現在、四つのサブグループ研究会が活動中である。会合の日時・場所の連絡や、資料の配布などは、それぞれの研究会の持つ名簿にしたがっておこなわれている。会合の開催について連絡して欲しい方、会合には参加できないが、資料だけは入手したい方、等は、それぞれの研究会の世話人に連絡をとっていただきたい。

現在、活動中の研究会とその連絡先は次の通りである。

∧社会調査データ開発研究会∨
連絡先は、（〒一〇六）東京都港区南麻布四—六—一　統計数理研究所　鈴木達三氏。

∧健康指標と保健医療評価研究会∨
連絡先は、（〒五六〇）大阪府豊中市待兼町一—一　大阪大学保健センター　井上通敏氏。

∧評価問題研究会∨
連絡先は（〒一五三）東京都目黒区下目黒六—五—二二　国立教育研究所　梶田叡一氏。

∧データ解析と統計数理研究会∨
連絡先は（〒一〇〇）東京都千代田区永田町二—六—一　電子技術総合研究所　岩坪秀一氏。

会議議事録要旨

◇第六回理事会（十一月二十五日）
於　統計数理研究所
出席者　理事十名

1. 来年度大会開催校を青山学院大学に決定。主催校で実行委員会を作ってもらい、運営委員会、事務局等と相談の上、具体的な案をかためることを了承。
2. 月例シンポジウム、講習会について運営委員会より報告。
3. 欧文誌幹事会より「Behaviormetrika」No.1の会計報告、海外への宣伝方法、No.2の原稿の集まり状況等についての報告。十二月末日が締め切りとなっているが良い論文を積極的に集めてもらうよう働きかけることが要望された。
4. 和文誌幹事会より「行動計量学」第二号、第三号について報告。第三号は原稿難であることから欧文誌同様良い論文が集まるよう働きかけを強めることが要望された。
5. 第一回行動計量学シリーズ企画委員会の報告。委員長に青山理事が選出されたこと、出版社、学会との関係、執筆者の決定等、の問題についてさらに検討する必要のあること等について了承。
6. 事務局より会計報告。十二月に和文誌を送る時、会費を催促し集めるようにする。現在一般会員六三〇名（十一月十二日現在）賛助会員二八口となっており、賛助会員をふやすことが要望された。
7. その他

◇第八回運営委員会（十月二十八日）　於　慶応大学
出席者　委員十名

1. 月例シンポジウムについて。
次回月例シンポジウムを十二月十四日（土）統計数理研究所にて「非数理系における行動計量学の教育―現状と将来の展望」のテーマの下に開くに当たって、講師の人選等を最終的に決定。二月の「ケース・スタディの問題」は丘本正氏が不可能のため阪大の井上通敏氏をオーガナイザにお願いする旨交渉にあたることを了承。四月の「計算機に関する諸問題」は準備中。六月は芸術関係の問題をとりあげるべく豊川裕之氏、安本美典氏をオーガナイザーに依頼し準備にあたることを決定。
2. 講習会について
十一月二十八日～三十日の三日間、電子工業会館において「人工知能と行動計量」と題する講習会を十名の講師により行うこと。来年度は、四月下旬「市場調査」、十月下旬「新製品設計管理」、の予定で検討をすすめることを了承。
3. 行動計量学シリーズについて
企画委員会の招集がおくれているため、まだ活発な行動はなされていないが、行動計量学のイメージ作りを主体にするため欧文誌、和文誌以外の一般啓蒙書を目指すシリーズとすることを運営委員会として積極的におしすすめることに決定。
4. その他

◇第九回運営委員会（十二月十六日）　於　立教大学
出席者　委員七名

1. 講習会について
「人工知能と行動計量」は参加者が二十八人で赤字となった。今後の講習会についてはテーマを方法論的なことにしぼり、月例シンポジウムと性格の異なるものとする。次回の講習会のテーマは「市場調査」の線で実行小委員会（野崎、丸山、小谷津）で検討し、二月には具体案を提出してもらう、なお会員に限定せず広く宣伝する、等を決定。
2. 月例シンポジウムについて
十月十二月二回の月例会の参加者がいずれも二十五人前後と少数であった。参加者をふやすことにあまり神経質になる必要はないが、案内の送り先を会員に限定せず広く宣伝する。次回のシンポジウムは来年二月大阪大学で「予測」をテーマにして行なう、（オーガナイザー古川俊之、井上通敏）等を決定。
3. 小研究グループについて
四つの研究小グループの活動状況の報告
4. 来年度総会実行委員会について
次年度の開催校である青山学院大学より、運営委員会から実行委員を推せんして欲しいとの要望があったので、運営委員会としては、豊川、小谷津、近藤委員に依頼することを決定。

会員の声

学会の雰囲気に問題はないか

作りたての学会は、学会に参加することそれ自体が喜びであり、業績などは余り問題とされないのが普通である。従って、学会内部の雰囲気は人々をひきつけるようなものでなければならないし、従来の権威主義的な人間関係を捨て、建設的な新しい人間関係を作るようにしなければ意味のないものである。

まして、行動計量学会は学際的研究の先駆をなすものであるから学部内部の格差からくる差別的権威主義は存在すべくもない。しかし、この学際的研究には以下の二つの難があり、一見純粋な学際研究が存在しないかのようにみえる。すなわち、一つは研究者自身、他の学問研究について深く知ることなしに、口出しするという弊害であり、他の一つは、研究者自身、自分の専門分野の目で他の専門分野を評価しようとする弊害である。この場合、このようなディレッタンティズムを回避するのに方法論的調整がなされる必要がある。さらに、ある学問分野について専門家としてなりたっている人に、他の専門分野の初歩から教え込むようなチャンスを十分にあたえる場を作るよう行動計量学会としては努力する必要があるのではないか。

新しい未開拓の課題をになって設立された学会にふさわしい清新な活動が展開できるよう、不毛な権威主義の一掃と、会員の相互刺激、相互教育の強化を呼びかけたいと思う。

（KN生）

月例シンポジウム予定

月例シンポジウムは、次の予定で準備が進められている。会員諸氏の積極的な参加をお願いしたい。なお、テーマその他についての要望や意見を事務局までお寄せいただきたい。

◇第五回月例シンポジウム
〈日時〉二月二十二日（土）
〈場所〉大阪大学付属病院
〈テーマ〉「予測」
〈オーガナイザー〉古川俊之
井上通敏、の両氏

◇第六回月例シンポジウム
〈時期〉四月　〈場所〉未定
〈テーマ〉「計算機に関する諸問題」
〈オーガナイザー〉近藤遠氏

◇第七回月例シンポジウム
〈時期〉六月　〈場所〉未定
〈テーマ〉芸術に関する問題
〈オーガナイザー〉豊川裕之、
安本美典、の両氏（予定）

編集後記

学会設立後満一年半がすぎ、学会としての諸活動もかなり地についてきたようである。月例シンポジウムや講習会も一応の軌道に乗ったし、それぞれのサブグループ研究会も、一応の基礎作りを完了したようである。また、この秋には、学会の前身時代から続いてきた枠を破って、統計数理研究所以外のところでは初の学会大会が、青山学院大学を会場に開催される予定である。学会としての基盤が固まってきたという点は、御同慶の至りである。

しかし、これと同時に、既成の学問の枠組みにこだわることなく、共通の課題の解決に、あるいは共通に関心を持つ現象の解明に、計量的数理的アプローチを試みるという志向性のみでは一致しながらも、多様な発想をぶつけ合って、新しい視野を獲得していく学際的という、学会設立にあたっての意気ごみが薄れてくるようなことがあれば大変である。学会の発展は、いやその存立自体が、専門的バックグラウンドの違いを越えた会員相互の手のつなぎ合いの意欲にかかっているといってよい。

この会報も、微力ながら、その目標に向かって貢献したいと思う。本号から「会員の声」欄をもうけたのもそのためである。会員諸氏の卒直な御意見、御投稿をお待ちしている。

（梶田記）

講習会テキスト等をお頒けします

第二回講習会テキスト「人工知能と行動計量」（二千円）と第二回学会総会（昭和四十九年度）発表論文抄録集（千五百円）の残部があります。希望者にお頒けしますので、代金同封の上、事務局にお知らせ下さい。なお、送料は事務局で負担しますので不要です。